

思春期患児を持つ母親との面接における 面接者の逆転移について

本田 優子

A Countertransference Occurred with a Counselor during the Interview
with a Mother having an Adolescent Patient

Yuuko HONDA

(Received September 1, 1999)

To get effective mental support for a mother having an adolescent patient, it was considered to be important for the counselor to understand countertransferences occurring with the counselor during the interview with the client, and to learn how to deal with the countertransferences. The process of the interviews, which were repeated 10 times with intervals of a week or two weeks, and at the later stages with intervals of a month, was analyzed from the psychodynamic point of view. These analysis revealed the following findings:

1. At the early stages of interview process, the counselor felt that she could not bear to hear the mother's self-reproach and that the process of interviews was entirely under control by the mother.
2. The counselor had a countertransference reaction that was to require the mother to do a task, while the counselor was not aware of her countertransference.
3. The counselor's countertransference caused discouragement to the mother who complained that she could not praise her son three times a day.
4. In order to apply the counselor's countertransference effectively to the client, it was necessary for the counselor to monitor her own state of emotions carefully and take an effort to analyze herself. And especially when the counselor intended to take an action against the client, considerations for why she wanted to do so were required.
5. After reconsidering and recognizing the relationship between the counselor's mother and the counselor herself, the counselor could grasp appropriately the relationship between the client's mother and the client, and then could get the client to successfully provoke the insight into the client's emotions.

Key words :counselor, countertransference, interview, a mother having an adolescent patient

I はじめに

身体的成熟という第二次性徴を特徴として始まる思春期は、P. Blos が「第二の個体化を体験してはじめて精神的に両親から分離しうる」¹⁾と述べているように両親との心理的分離の時期であり、また情緒的には不安定で羞恥心が強く、秘密を持ちやすいうえに突っぱる傾向があり、心理的に最も不安定な時期である²⁾。したがって、思春期の患児に関わる看護者は戸惑う場面に遭遇することが多いが、看護教育の中では、思春期患児の看護について、詳細に語られることは少ないのが現状である³⁾。一方、看護現場では、患児の母親への心理的援助の要請も重なり、看護者の心理的負担はさらに大きくなってくる。これら母親への援助を難しくしている要因として、看護者が看護者自身の母親に対して抱いていた情動やコンプレックスが活性化し、そのため患児の母

親との関係が悪化または停滞してしまうことが考えられる。そこで今回、思春期の患児をもつ母親への心理的援助をもとに、看護者の逆転移感情の取り扱いについて考察し、結論を得たので、ここに報告する。

ここで、転移とは「現在の人間に向かう感情、欲動、態度、空想、防衛についての経験である。それらは現在の人間にふさわしいものではなく、早期幼児期の重要な人物との関係に由来する反応の反復であり、無意識的に現在の人物へと置き換えられたものである」⁴⁾とし、逆転移とは「患者の転移反応に対する治療者の意識的かつ無意識的な反応」⁵⁾とした。

II 研究方法

1. 面接対象および家族背景

対象は中学2年の長男（以下、患児）に対して「このままの成績では、いい高校に入れない」という不安を訴える40歳の母親であり、その家族構成は図1に示すとおりである。

面接動機は、面接者である筆者の友人（学習塾の経営者）S氏から、母親の訴えを聞いてほしい、母親も面接を受けたがっているとの要請があった。母親の状態は、一日に何度も塾へ電話を

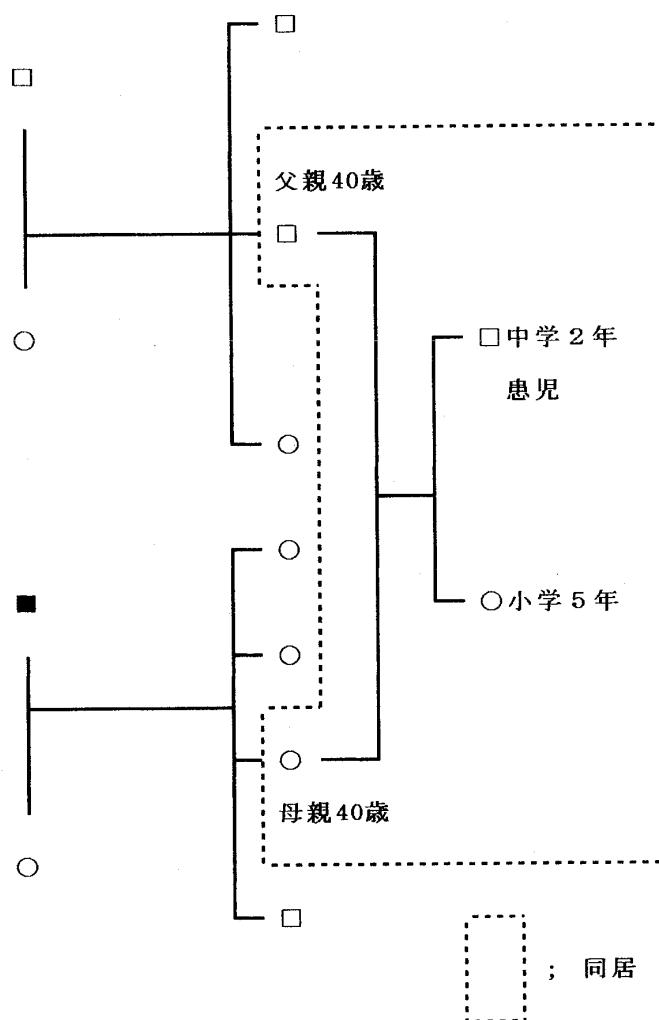


図1 家族構成

かけ、何とか成績を伸ばしてほしいと矢継ぎ早やに話すという状態であった。塾経営のS氏によれば、患児の学業成績は、学年中最下位に近く、落ち着きがなく勉強に集中できないという。

患児の父親と母親の学歴・職業については、父親は3人兄妹の次男であり、中学時代は成績が1番だったと母親は言う。職業は変則的勤務の仕事に就いている。母親は4人姉弟の三女。患児が塾の先生に話したところによると、母親は姉弟の中で成績が悪く、コンプレックスがあるとのこと。職業は週2、3日のパートをしている。

2. 面接者の生育歴・母子関係

面接者は3人姉妹の長女として生まれた。家庭は兼業農家をしており、父親は地方公務員のため農業は主に父親の両親と稼いできた母親がしていた。面接者の記憶では、母親と舅との折り合いが悪かったが、気丈な母親はそれでも何とか仕事と家事育児をこなしていた。面接者が小学校時代から中学校時代にかけては、この母親が勉強を見るという形で教育しており、面接者としては厳しい母親の印象を持っていた。勉強ができることが当たり前であり、自分のことは自分でという自立を求めた母親であった。

その後面接者は、高校・大学は地元の学校に進み、大学で看護学を学び、大学院は関東に出て、精神看護学を学んだ。そして、大学院終了後母校の大学に帰り、看護教員として面接時3年目である。

3. 面接方法および分析方法

対面法による一回90分の面接を約8ヶ月間行い、前半は毎週または隔週に一回の割合で、後半は月一回の割合で計11回行った。面接の場所は大学内の一室であった。数回の面接後、会話記録を元に精神分析研究者一人からスーパービジョンを受け、相談者と面接者の心理的理義と面接方法についての指導を受けた。そして、この面接過程について精神力動的視点^{6~10)}中でも自我心理学の視点より分析を行い、面接者の逆転移とその対処について考察した。尚、相談者の母親をCL(クライエント)、相談を受けた筆者を面接者と表現する。

III 結 果

1. 面接契約

- 1) 面接目標：患児の受験に関する母親の不安の軽減、母親の周囲の人との問題や母親自身の問題の解消
- 2) 面接構造：大学内の一研究室にて、週一回90分で10回前後の一対一の面接を行った。

2. 面接経過

面接経過を表1と表2に示す。

3. スーパービジョンの内容

第2回面接終了後に最初のスーパービジョンを受けた。この頃面接者はCLの圧倒されるような話しうりと自責感の訴えに耐えきれない気持ちを抱いており、やや逆転移反応としての発言をしてしまっていた。これに対し、スーパーバイザーから、CLの感情が先走ってしまう面接を修正

表1 面接経過1

第1回面接（8/25）：自責感、不安

CLは患児の妹と共に来所する。このままの成績では、CLが希望する高校に長男（患児）が合格しないという不安を訴えており、訴えのテーマは「私が変わらなければいけない」、「育て方を間違っていた」という自責感であった。また、学歴への拘りが強く感じられた。

第2回面接（9/7）：本人のやる気、夫婦のはけ口

患児と共に来所した。ここで患児が席を外した時CLは、「成績が伸びないのは本人のやる気のせいである」と話しつつも、そのような落ち着きのない患児の状態は、「夫婦のはけ口だったのかもしれない」「母原病だ」とCLは話した。面接者自身、CLの自責感の訴えに対して耐えられない気持ちを抱いた。

第3回面接（9/14）：実母・姑への恨み、夫への不満、母子分離不安

CLの訴えは、患児の問題以外に、CL自身の実母・姑への恨み・夫への不満などを語るようになってきた。さらに「あの子（患児）は私を恨んでいる」という思いが語られたが、これは、幼い頃実母に虐待されたCL自身を患児に投影しており、迫害者としての実母とCLとを同一化して、患児を虐待していたことが考えられた。それまでの患児との共生的関係から、徐々に、「近頃、（患児が）成長したと思う」「息子を離したくない」という母子分離の作業に入っている。

第4回面接（9/21）：面接契約

CL自身の葛藤の解決が必要であると感じた面接者は、CL自身の問題点に関して質問すると、CLは「喜怒哀楽が激しい」ことを挙げた。そこで、面接者からの提案で今後、面接を行い、CL自身の問題を探求していくことになった。

第4回面接以降、3週間の期間（10/5、12休み）があったため、面接者は、CLが面接の必要性を感じず、面接の場を苦しく思うようになってきたのではないかと不安になった。

第5回面接（10/13）：CLの自我同一性の問題、CLと患児の類似点、課題設定

第4回面接後、CLおよび面接者にも一区切りした感じがあったためか、次週は面接者からの延期申し出やCLの用事のため3週間後に第5回面接となった。この回ではCL自身の「自分は何だろう？」という自我同一性の問題が出され、「息子は私と似ている、本当は気が小さい、行動が伴わない」と患児との類似点を見い出していた。また、「（CLが習っている）お花（の稽古）に行きたくない、あの子が勉強したくないのが分かる」と患児の感情まで推し量ることができていた。第5回面接では、面接者はCLの肯定的自己評価を高めるために、患児の長所を挙げることや、一日三回患児を褒めるという課題をCLに提案した。これは、それまでの支持的受容的態度とは逆の指示的態度となっている。次の10/26はCL休み。

第6回面接（10/27）：CLの自信、母子分離不安

患児の成績が急に伸び、CLは「自信がついてきた」と言い、家族のあり方も「（これまでで）一番よい」と認めることができるようになり、一方では、思春期に見られる患児の声変わりに「ゾーッとする」と言ったり、修学旅行の見送りに行って患児に「早く帰れ」と言われ、「（母親から）離れて行ってるんですね」と寂しさを言葉にし、患児に対しても「（人生を）あんたらやれるかな」と肯定的な言葉かけができるまでになってきた。

CL：相談者（母親）

するために、CLの日常の具体的な事柄について聴くことを提案された。

次は第7回面接後の面接中断期間中にスーパービジョンを受けた。この頃CLは抑鬱状態にあり、面接を中断していたが、スーパーバイザーからは、面接者の逆転移の構造とメカニズムを明らかにして、CLに関わることを提案された。

表2 面接経過2

第7回面接（11/7）：実母への恨み

面接中、塾のS氏の名前を言うべきところを、何回も面接者の名前を使い、CLはその言い間違いに殆ど気づいていない様子だった。患児との分離作業が深まつくると、CL自身の母親に対する恨みを、ナチスのユダヤ人強制収容所での虐待と二重写しで話すようになつていった。この時、面接者はCLの言い間違いの多さに戸惑いながらも、CLが患児のよい面を認められるようになつたり、患児もCLに甘えるようになってきたという母子関係の進展が見られたため、面接者は落ちついてCLに対応できた。

その後4週間（11/13, 20, 27, 12/4は休み）は、CLの忙しさのため電話での会話となり、徐々にCLの状態が悪化し、「鬱病が出ました」、「子供の希望は満たしてやつてるんです、だから、親の意に添わないと腹が立つんです」と発言するようになった。これは、CLの実母への恨みについて面接者がとり挙げたことが契機となって、再び「攻撃者との同一化」による患児への虐待が再燃したと考えられる。

第8回面接（12/14）：母子分離不安

前回の面接から4週間後の第8回面接では、CLは「あの子は離れたがってるけど私が子離れできない」「一日中あの子のことばかり考えている」と子離れの葛藤を表現している。この頃は「（患児が）思春期だから、（私は）できるだけ感情を出さないようにします」と努めて我慢している様子だった。次の12/21はCL休み。

第9回面接（1/16）：夫の変化、CLの落ち着き

CLは「開き直ったらよいです。近頃落ちています」と言いながらも「なかなかあの子は親の気持ちを分かってくれない」と患児への要求の高さが窺われた。この頃の特徴は、夫がCLの話を聴き、家庭を大事にし始めたため、CLは「楽になりました」と発言するようになり、気分的に落ち着いてきたことであった。

それ以後3週間（2/6, 3/1は休み）は、CLは「とても調子がよい」と言っていたが、一週間もすると塾の先生に「不安で仕方ありません」と頻回の電話をかけるようになった。また、「怒りません」と言いながらも、実際は患児をひどく怒ってしまい、自己嫌悪に陥るという感情のコントロールができない状況となった。しかし、一方では「（成績が悪いのは）以前は本人の努力としか思っていなかった。でも、近頃は……」と家族の態度の大切さに気づいてきた。

第10回面接（3/8）：実母への恨み

CLから実母への恨みが溢れるように語られたため、面接者は聴くことに徹し、「小さい頃のお母さんとのことが、あなたと息子さんとの障害の根源になっているんですね」と指摘した。すなわち、患児との関係は、根本的にはCLの母親との葛藤が未解決であることに起因していることを指摘した（直面化）。すると、CLはナチスの強制収容所に入れられたユダヤ人と自分を同一視し、「許そう、でも忘れない」という被害者意識を語った。

第11回面接（4/1）：自己洞察、終結

1ヵ月後の第11回の面接の初めに「（前回は）自己嫌悪になって帰った。先生（面接者）に笑われたなど。憂鬱になり子どもに当たつたり」と語り、実母への恨みを話したことで自己嫌悪に陥り抑鬱状態になつたことがわかった。ところが一方、患児は「塾をやめる」「卓球したい」と意志表示するようになつていていた。

今回の特徴は、CL自身で自己分析し「私は完全じゃないとダメと思ってます、子どもにも完全を求めるんですね」と言つたり、「まだ私は親離れしていない。嫌いだけど（母に）頼っている。忘れんといかんけど、苦しかったから、優しい気持ちになる時も、もう許せんという時もあります」と親子三代にわたる葛藤を認識できるようになったことである。さらに、最後に「私は意地悪なところが奥底にある。あの子を虐待したのもこれだろうと近頃気づくようになりました」と内省できるようになった。この回をもつて、母親は来談しなくなつた。塾のS氏からの情報では、以前よりも母親は落ち着いて患児を見ている様子のことである。患児も「（中学）2年の時より、今の方が家はいい」と塾のS氏に発言している。

CL：相談者（母親）

IV 考 察

情緒的問題を持つ思春期患者の母親との面接をもとに、転移・逆転移の問題、面接中断と終結の仕方、面接者の逆転移とその対処について精神力動的視点より考察する。

1. 相談者の面接者への転移の解釈について

CLは面接初期から、「私が育て方を間違っていた」「私がやっぱり駄目にした」という自責感を訴えることで、面接者に依存欲求を示していたが、これはCL自身の母親との葛藤の未解決に起因していると考えられ、この点について、CL自身も面接後半になると、「よく分かっているのに（患児への干渉を）続けるのは何だろう。母もよく怒ってきたからかな？」と気づくようになった。つまり、母親に保護的に扱われず、気持ちを分かってもらえない寂しさを、面接者に依存することで埋め合わせをしている転移感情であったと解釈される。

2. 面接者の感情的・行動的反応（逆転移）

面接初期に面接者はCLの自責感の訴えに耐えられず、「（患児の状態は）お母さんだけの影響ではありませんよ」と言ってしまい、CLを沈黙させ考え込ませてしまった。この時の面接者の発言は、CLの気持ちを押さえ込もうとする働きをしていたと考えられる。つまり、表面的にはCLの自責感を軽くしてあげたいという面接者の発言に聞こえるが、裏面的には、「私（面接者）に依存しないでほしい」というメッセージが暗黙のうちに伝わったと考えられる。この「依存しないで」というメッセージは面接者が面接者の母親からもらっていたメッセージであり、さらに、CLがCL自身の母親からもらっていたものでもあったと解釈される。

この時の面接者はCLに介入しすぎたと思い、中立性の必要性を感じたものの、逆転移反応であるとの認識は無かった。

次に面接契約を終えての第5回面接時に、面接者はCLに「一日3回（患児を）褒める」という課題を提案した。しかし、この課題は結局、「一日3回も褒められない」という挫折感をCLにもたらしてしまった。この課題設定は無意識的には面接者自身の面接継続への不安から行われたと解釈される。つまり、第4回面接において面接契約をしたもの、その後CLの都合や面接者の都合により3週間空いてしまったため、CLが面接に意欲を無くすのではないか、あるいはもう止めたいと思っているのではないかという面接者の不安が強くなり、第5回面接ではCLに面接の効果を感じてほしいということから無理な課題設定をしてしまったと考えられる。

面接継続への面接者の不安も、見捨てられる不安であり、うまくできないと評価してもらえないという面接者の母親転移が根底にあったのではないかと解釈される。

3. 面接中断と終結の仕方について

今回の8ヶ月余りにわたる母親面接の中で、面接の中止が幾度かあった。

第4回面接で面接契約を結んだ後、CLの都合で10月5日が12日になり、さらに13日に変更された。この面接中断については、面接者も第4回まで一区切りという印象を持ち、これから本格的な面接に入るという心構えをしていた時であったので、一呼吸おく意味で、中断はむしろほっとした。しかし一方で、面接者は弱気になり、CLが面接の必要性を感じていないのではないかと考えたり、これから面接でCL自身の問題を深く取り上げていくことへの無意識的な抵抗

ではないかと考えていた。

次の中断は、10月26日の面接予定がCLの急用のため翌日に延期になった。そして第7回面接(11月7日)後に、CLの仕事の都合(11月13, 20日, 12月21日)や参観日(11月27日)、さらにCLの抑鬱状態(12月4日)のために面接の中断があった。この時期の中止は、第7回面接でCLの実の母親への恨みを面接者が取り上げたため、CLは実母への攻撃的な感情を再体験し、抑鬱状態に陥ったと考えられる。河合¹¹⁾は母親面接について、「日本人の人間関係は、あまりにも明確にすると相手を不安に陥れたり、無用な防衛を引き起こしたりすることが多い。」と述べ、明確化への注意を促しているが、今回の面接でCLの実母への恨みを明確化するときには、面接者との信頼関係を基盤に、CLが実母への感情を受け止められるか査定しておくことが必要と思われる。しかし今回、CLは面接者が明確化した実母への恨みの感情を処理できぬまま、一方では息子である患児に向け、患児と取組み合いをしたり、親の意に沿わないからと腹を立て、また一方では面接者に向け、面接の中断という形になったと考えられる。

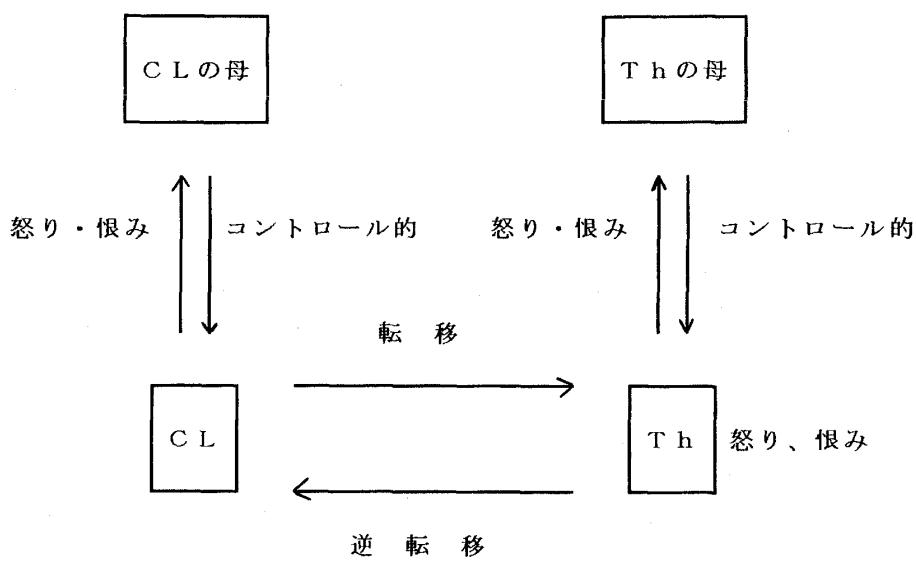
次に第9回面接(1月16日)後に、CLは調子がよいから(2月6日)とか抑鬱(2月15, 19日)、授業参観(3月1日)のために面接を中断した。第9回面接では、患児の父親が「勉強しろ」と患児に言い始め、患児自身も「頑張るもん」と言っているとのことだが、CL自身は、「なかなかあの子(患児)は親の気持ちを分かってくれない」とヒステリックにキーキー言っている状態だった。しかし、「老い」に関するテレビ番組を夫が見たことをきっかけに、夫は家族を大事にし始め、CLの話も聴いてくれるようになったという。ここに来てやっと夫がCLのサポート役になりつつあったと考えられるが、面接中断の1月下旬から3月上旬は受験の時期であり、患児の受験まであと1年後とは言え、CLの不安が高まったのではないかと考えられる。それはCLの「不安でしようがない」という言葉や、「(患児を)怒りません」と面接者に言いながらも、実際は患児をひどく怒って自己嫌悪に陥っていたことから推察される。

第10回面接(3月8日)において、CLが実母への恨みを語った時、面接者が“CLの実母との葛藤の未解決が患児との葛藤につながっていること”を明確化したことで、さらにCLの実母への恨みの感情をかきたたせたと考えられる。そして第11回面接の頃(4月上旬)、患児は「塾を辞める」「卓球をしたい」と言い出したり、それまでCLが夜添い寝をしていたが、「一人で寝たい」と言ったりという変化が見られた。この患児の親離れは、CLにとって辛い出来事ではあったが、CL自身の実母との親離れを促したと考えられる。そして引いてはこのことが、面接の場あるいは面接者からの自立となり、来所しなくなったのではないかと考えられる。

母親面接での終結の時期について、田畠¹²⁾は母親の人間関係の変化を上げている。つまり、母親が子どもに適切な働きかけができるようになり自信をつけ、さらに日常的な人間関係を拡げて面接者に代わる役割をもつ人を見出していくこと、また、家族メンバーが自分の役割を引き受けていくことが上げられている。今回の面接においては、CLが以前よりも患児に対して心理的な距離を持てるようになり、父親がCLの勉強に積極的になったり、CLの話に耳を傾けるようになったりとCLの人間関係に変化が見られている。これらのことが面接を終結に向かわせたものと考えられるが、一方で、CLは終結後も塾の先生に患児の勉強や受験について相談を続け、アドバイスを求めたり、不安を聴いてもらったりしている。以上のことから、面接の場はCL自身の問題解決の場として使われ、塾の先生への相談は、現実的な患児の受験の相談に使われていたと考えられる。

4. 面接者の逆転移とその対処について

面接場面で面接者が体験した逆転移の構造を図2に示す。



T h : 面接者、CL : 相談者（母親）

図2 逆転移の構造

予備面接である第4回までの面接において、自責的な訴え・夫や姑への不満・実母への恨みが語られ、面接者はCLの一方的な訴えを聞くことに耐えられない感情を抱いていた。第4回面接までは、主に面接者がCLの訴えを支持的受容的に聴いていたが、第5回面接では一転して、患児を「一日三回褒めること」という課題を面接者が提案し、CLも受け入れている。面接者が以上のことを探した理由は、CLの一方的で圧倒するような雰囲気から抜け出したい、CLのペースで進んでいく面接に耐えられない気持ちがあったことである。また、課題提案の直前に、CLが「私は悪いところばかり持っている気がする。自信を持って生きたい」という自責的表現と将来への希望が語られたため、これを受けて、面接者は何とかCLのよい面を引き出し認めさせてあげたい、つまり、患児をほめることでCLの自己評価を高めたいという思いが強くなっている。ここで面接者は、その場面をコントロールし、且つCLを救済しようとする立場をとっていた。このコントロールと救済は、「あなたのためなんだよ」という押しつけがましい母親的態度に似ている。これまでの、面接者の対人関係を振り返ると、一方的に話す人には苦手意識があり、相手の訴えに共感できない経験を繰り返してきたことが思い出される。更に、幼い頃には、勉強や日常についての母親の注意に対し、自分が反抗できないことを悔しく思っていた。反抗したくても、その後叱られることを思えば恐くて出来ず、つらい気持ちも分からずにいる母親への恨みの感情を持っていたことがある。以上のことから、面接者は自分の母親をコントロールする欲求を満たす代わりに、面接の場を借りて、CLをコントロールしようとしていたと解釈できる。

CLの持つ問題の根本が、「生い立ち」と表現されるように、幼い頃母親から可愛がられることなく、本人も反抗的で「虐待された」「ナチスの強制収容所のユダヤ人と同じ」と言うような状況であった。それは、面接者に面接者自身の抑圧された母親との葛藤を引き起こす要因となった。つまり、面接の場で面接者が一方的に聞かされる（コントロールされる）立場となったことで、

面接者自身の母親との葛藤が再燃され、満たし得なかった面接者の依存攻撃欲求を処理しようとしていたと推察できる。松木¹³⁾は、逆転移の二側面について、(1)治療者の病的反応、と(2)患者の葛藤の反映としての逆転移、を上げているが、今回の面接者が体験した逆転移は、後者として捉えられると考えられる。この逆転移について皆川も、「意識的には患者を心配するつもりであっても、無意識的には自己の幼児期の対象との間で神経症的な欲動の満足を追い求めるに過ぎない」⁵⁾としつつも、「その存在を知っているか否かが重要なのだ」⁵⁾と述べているように、面接者自身が如何に自己分析¹⁴⁾あるいはスーパービジョンによって自分の心理状態を理解しているかが、面接を実りあるものに出来るかどうかのポイントであろう。ただ、松木¹³⁾が指摘するように、この面接者自身の逆転移の感覚・感情を面接中には焦点づけする必要はなく、モニタリングしておくことが必要と考えられる。

思春期の子どもを持つ母親が、何等かの援助を求めて来るのは「程度の差はある、一様に傷ついているように見える」¹⁵⁾と言われている。つまり、わが子の存在そのものが親としての自尊心を損なわせるものとなっている。したがって、本来なら、このように傷ついて援助を求めて来た母親に対しては、母親側の自尊心の尊重が、面接者に求められるところである。しかし、今回のように、自罰-自責的パターンのCLの場合、“母親自身の性格形成の過程で、母親の両親から正当な自己主張を極度に抑制されていたり、自責的な両親のどちらかに母親が同一化してきた”¹⁵⁾と言われており、今回のCL自身も「虐待された」という体験をしている。そして更に、面接者の持つ葛藤がCLと類似のものであったため、面接者自身の葛藤にとらわれてしまい、CLの自尊心を尊重する対応よりも、CLをコントロールするという面接者の逆転移反応をしてしまっていたと考えられる。

このように、面接過程上有害と思われる逆転移も、小此木が指摘しているように面接者が前意識的に一人二役を演じることで、その逆転移の運命を左右することが出来る¹⁶⁾。つまり、S. Freudの言う emotional withdrawal (中立性を保ち、自己を観察する) な態度と、Ferencziの言う emotional availability (患者から伝わって来る無意識的な伝達に対する豊かな共感と同一化) の発揮という両側面である。

つまり、今回の逆転移の積極的活用のためには(表3)、CLの一方的な罪悪感の訴えや面接の場

表3 逆転移の積極的活用のために

-
1. Thが課題設定したくなかった→何故ここでそうしたくなかったのか考える
(逆転移の解釈)

Thは受け身に耐えられない



Thの母親に対してもそうだった



Thの母親との嫌な感情を思いだし耐えられないのではないか?

-
2. CLに「あなたの母さんから、一方的に自主性を摘まれてきたのでは?」と問う (逆転移の活用)

ThとThの母親との関係を振り返り



CLとCLの母親との関係を推察しCLに問い合わせる

Th: 面接者, CL: 相談者 (母親)

を自分本位にコントロールしようとする態度に対して、面接者が耐えられない気持ちを起こしても、そのような感情を抱いていることに気づき、自己観察し、逆転移反応を理解して、面接場面では中立性を保って接していくことが、面接者が S, Freud の言う“鏡としての機能”¹⁷⁾となり、CL 自身に自分のあり方を認識させ、洞察を深めさせていくことであろう。

また、皆川⁵⁾は逆転移の活用に際して、「(1) 自己愛傾向の強い精神療法家は逆転移を活用することが出来ない、(2) 逆転移を活用する前提として精神療法家は自己の転移のパラダイムを知る必要がある」と述べ、自分自身の反応の傾向性、引いては自己分析の必要性について言及している。そして、3つの水準で逆転移を治療的に活用することが出来ると述べている。この中の第三の水準は、現実的関係であり、これは、面接者が患者の転移を解釈することにより、患者の面接者像が現実の治療者に近づくことである。この視点に立てば、面接者は CL の転移について解釈をすべきであったが、面接者は“いまここで (Here and Now)” の CL からの面接者への母親転移を解釈¹⁷⁾（「実の母親に支配されて苦しかった思いを、今ここで、私（面接者）との関係の中で解消しようとされていますね」）していなかった。よってここでは、解釈により、CL の持つ面接者イメージを恐い・満たしてくれない母親像から等身大の現実的な面接者イメージに修正させ、CL も面接者も力を合わせて問題を取り組めるようになることが期待された。

今回の母親面接を通して、面接者と面接者の母親との葛藤の再体験・逆転移反応が明らかとなつた。今回は、母親に心理的援助をする上での示唆を得ることができたが、今後は、今回とは違った母子関係調整への援助を重ね、有効な介入のあり方を探っていきたいと考えている。

V 結 論

面接者の逆転移とその対処について以下に述べる。

- (1) 面接初期から母親から自責感を訴えられ続け、面接の場を一方的にコントロールされると、面接者の中に「耐えられない」という感情がおこった。
- (2) 面接者は逆転移感情に気づかず、面接の場をコントロールしようと、課題設定という逆転移行動をとっていた。
- (3) 面接者の逆転移行動により、母親に「私は一日三回も（患児を）褒めることはできない」という挫折感を抱かせることになった。
- (4) 面接者の逆転移感情を有効に活用するためには、面接中の面接者の心理状態のモニタリングと、その後の自己分析に努め、特に母親に対して行動を起こす時に何故そうしたいのかと解釈をする必要があった。
- (5) 面接者の母親と面接者との関係を振り返り、相談者である母親とその実母との関係を推察して相談者に問い合わせすることで、相談者に内面の洞察をもたらすことが出来ると考えられた。

謝 辞

本研究をまとめにあたり、御指導頂きました熊本大学教育学部心理学科名島潤慈助教授ならびに、熊本大学教育学部教育保健学科米村健一教授に心より感謝致します。

引用文献

- 1) Blos, P: The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 22, 169-186, 1967
- 2) 河野友信: 思春期と看護, 看護 Mook.26, 167-174, 金原出版, 1987
- 3) 吉武香代子: 看護の中の思春期, 看護 Mook.26, 1-7, 金原出版, 1987
- 4) 狩野力八郎: 転移-逆転移, 精神分析セミナーII (小此木啓吾他編), 53-82, 岩崎学術出版社, 東京, 1988
- 5) 皆川邦直: 活用できる逆転移, 精神分析研究, 33, 25-30, 1989
- 6) フロイト著作集第1巻から第11巻, 高橋義孝他訳, 人文書院, 1987
- 7) 精神分析セミナーI~V, 小此木啓吾他編, 岩崎学術出版社, 東京, 1988
- 8) 現代精神分析双書第II期①~⑯, 小此木啓吾他監修, 岩崎学術出版社, 東京, 1984
- 9) 野沢栄司: 青年期の心の病, 星和書店, 東京, 1984
- 10) 野沢栄司: 思春期の心理と病理, 弘文堂, 東京, 1981
- 11) 河合隼雄: 児童の治療における親子並行面接の実際, 季刊 精神療法, 8(2), 113-118, 1982
- 12) 田畠洋子: 併行母親面接の治療過程に関する一研究, 児童精神医学とその近接領域, 21(4), 236-247, 1980
- 13) 松木邦裕: 逆転移再考-精神分析技法理論からの一論及一心理臨床学研究, 14(2), 219-225, 1996
- 14) 保坂 隆: “看護婦の問題”としての“逆転移”(患者の問題?看護婦の問題!—「心理的ナーシング」とは何か<特集>), 看護学雑誌, 54(5), 465-467, 1990
- 15) 名島潤慈: 単独母親面接における治療上の留意点, 熊本大学教育学部紀要(人文科学), 32, 185-197, 1983
- 16) 小此木啓吾: 逆転移のとらえ方, 精神分析研究, 33: 9-18, 1989
- 17) O. Fenichel: *Problems of Psychoanalytic Technique*, Albany; Psychoanalytic Quarterly, Inc.1941, 安岡 誉訳: 精神分析技法の基本問題, 金剛出版, 東京, 1988